

保育における家庭支援のあり方
～事例研究と保育士・保護者調査を基に～

有岡 道博・白井 律子

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第64号改訂版抜刷）

保育における家庭支援のあり方 ～事例研究と保育士・保護者調査を基に～

The State of the Family Support in Nurturing: Based on a Case Study and an Investigation for Childminders and Protectors

有岡 道博^{1)†}・白井 律子²⁾

日本では高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により地域コミュニティの衰退は進み、地域の子育て力に対して大きな影響を及ぼしている。そのため、保育所はただ単に子どもをあずかり保育するのみに留まらず、親や家族からの子育てに関する相談を受け、保育士による子育て支援（家庭支援）を行う事となっている。しかし、子育て支援（家庭支援）のあり方は未だに十分明らかにされていない。

そこで、先行研究より示唆された帰納的アプローチに従い、事例研究（質的調査）と保育士・保護者調査（量的調査）を基に保育における子育て支援（家庭支援）のあり方を考察する。

キーワード：保育 家庭支援 信頼関係 保護者 保育士 インターフェース

1. はじめに

少子化、核家族化が進むなど変容する社会により家庭での子育てが難しくなっている。

親だけに子育ての負担と責任がのしかかる現代社会では、その孤独感、不安感などから派生する子育て問題も少なくない^{[1][2][3][4]}。2008（平成20）年の保育所保育指針の改定に伴い保育所の役割が「子どもの保育」「保護者の子育て支援」の二本柱となり、「保護者支援」が、クローズアップされ、その必要性、重要性はますます大きいものとなり保育現場の役割も重要なものとなってきた^[5]。2018（平成30）年の保育所保育指針の改訂では、「保護者支援」¹⁾が「子育て支援」²⁾となり、さらに具体的に子育て家庭への支援の実施が求められている^[6]。

そこで、子育てをしている親だけでなく子どもを取り巻く周りの人々（父、母、兄弟、祖父母、親戚など）や、家庭の背景、環境を踏まえた上での支援という観

点から、子どもを中心とした「子育て支援」を「家庭支援」と捉え、子育てを支えていくために家庭支援³⁾

（子育て支援）を行っていくには何が必要か、何が大切かを考えていくこととした。

2. 先行研究から

2008（平成20）年の厚生労働省の保育所保育指針に「保護者支援」の文言が現れたが、それまで保育所で使用されてきた「家庭支援」との混乱が見られた。そのためそのあり方（独自性）を明らかにする事がとめられた。

先行研究を見ると、山縣が2008（平成20）年に以下の「保護者支援」に関する研究方法を提示している。「こうした検証はおそらく、『保育ソーシャルワーク』という学術的なアプローチから可能となるものではなく、『保育所における保護者支援』という具体的な実践報告等から帰納的にまずは読み取る必要があると思われる」^[7]。

また、中谷等は山縣の提言を受け、2015（平成27）

¹⁾ 美作大学生活科学部社会福祉学科

²⁾ 津山市保育協議会研究部家庭支援部会

年に具体的な取り組みを先行文献から読み取り、「保護者支援」の特性や可能性を考察する試みを行なっている。その中で、課題として以下のように述べている。「先行文献に掲載される事例の多くは先駆的なものが多いと予想され、実際の保育現場との乖離も考えられる。今後はアンケート調査などを通して、保育所全体がどのような課題に対してどのように対応していくのか、(中略)その特性を生かした『保護者支援』のあり方を模索していく必要がある^[8]。」

現在、先行研究にも述べられているように、「保育ソーシャルワーク」などの枠組みから演繹的アプローチ⁴⁾を用いて「保護者支援」(以下家庭支援という)のあり方を検討するのではなく、保育現場の実践事例から帰納的アプローチ⁵⁾を用いて「家庭支援」のあり方を検討することが求められている。

3. 目的

保育士を中心とした保育現場での事例研究から「家庭支援」のあり方を検討した上で、家庭支援に関するアンケート調査を保護者と保育士に行い、帰納的アプローチを用いて保育における家庭支援のあり方を考察する。

4. 方法

1) 事例研究

①研究方法 縦断的質的研究 (パネル調査)

期間 2013 (平成25) 年4月より2018 (平成30) 年3月の5年間

対象 家庭支援グループ担当の所属する10園を利用する1歳から5歳の幼児の中で、何らかの問題を抱えるもの20人

②調査内容

保育協議会研究部家庭支援部会の担当保育士14名と大学教員1名が2ヶ月に1回集まり、抱える問題の分析と解決方法を探ることを目的とし、持ち寄った事例を検討していった。事例は、いずれかの保育士が実際に関わったものであり、資料以外の口頭での報告や質問に答える場面もあった。

5年にわたる研究期間の中で継続的に事例を検討した。その中で課題が解決されたものも多く、今後の家庭支援について貴重な知見が得られた。また現場の保育士が行っていることで、現場への反映(テイクバック)もすみやかにできた。

個々の事例の問題解決について検討する中で、検討結果を比較しやすいよう以下のポイントで様式の統一を行なった。

①事例の背景	②保護者の様子	③子どもの姿
④保育士の対応	⑤保育士の気づき	

また、研究成果の利用を考え、事例の資料より家庭支援に関する言葉や文章を抽出し(以下コーディングという)、グループにまとめて名前を付け、図解化を試みた。最終的には、個人情報などを排除したシンプルな家庭支援の概念モデルの作成と家庭支援を向上させるためのキーワードの抽出を試みた。

③倫理的配慮

全国保育士会の倫理綱領に基づき個人情報に配慮することを確認したうえで研究を開始した。事例については対象者が特定できないよう仮名を使用し、資料については検討会終了後回収することとした。

2) アンケート調査

①研究方法 横断的量的研究(自計式配票調査)

日時 2017(平成29)年3月3日~10日

対象 家庭支援グループ担当の所属する9園の年長児を除く保護者496名、保育士153名

回収率 保護者81%(402人)

保育士88%(135人)

②調査内容

保育士と保護者の家庭支援に関わる思いの違いを探ることを目的に調査項目を作成した。保護者については、子育ての楽しみや不安、悩み、相談相手、相談内容、保育士の対応等について聞いた。回答については単項目選択と多項目選択とし、多項目選択は選択後に1番から3番までの優先順位をつけた。対応については、マイナス面(疑問に思ったこと、傷ついたこと)、プラス面(嬉しかったこと)を自由記述で回答を求めた。

保育士については、仕事のやりがい、保護者との信

頼関係、保護者対応での悩み、悩んだ時の相談相手、保護対応で心がけていることを聞いた。回答については単項目選択と多項目選択とし、多項目選択は選択後に1番から3番までの優先順位をつけた。保護者対応については自由記述で回答を求めた。

③倫理的配慮

保護者アンケートの冒頭に、実施の目的と提出が義務ではないことを明記し、口頭で説明の後、無記名で送迎時に所定のアンケート入れに投函することとした。保育士アンケートは、朝礼などで実施の目的と提出が義務ではないことを伝え、無記名で所定のアンケート入れに投函することとした。

4. 調査結果と考察

1) 事例研究

①事例のまとめと概念モデル

記入の様式を統一し、持ち寄った事例の項目を検討して項目別で分類する中で以下の3点が家庭支援の柱としてあげられた。すなわち家庭支援は3つの形に分類することができるといえる。

- ・柱1. 保育士と保護者の信頼関係を築く
- ・柱2. 親子関係を支える
- ・柱3. 親の育ちを支える

それぞれの柱の事例を集め、その資料からコーディングを行い、結合してグループ化を行なった後、以下の名前を付けて整理した。①保護者の思い、②子どもの思い、③保育士の思い、④保育士の気づき、⑤問題、⑥支援、⑦食い違い（保護者と保育士）の7つの名前



図1 柱1. 保育士と保護者の信頼関係を築く (事例のまとめ)

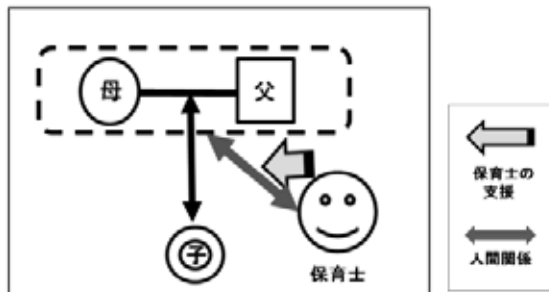


図2 柱1. 保育士と保護者の信頼関係を築く (概念モデル)



図3 柱2. 親子関係を支える (事例のまとめ)

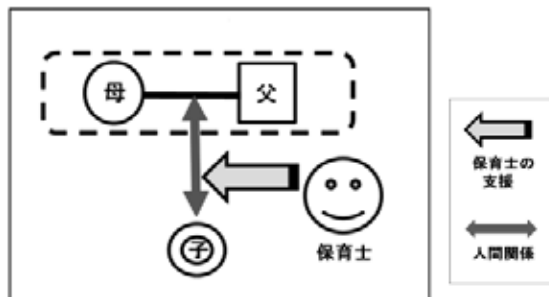


図4 柱2. 親子関係を支える (概念モデル)

がつけられた。そして、それぞれの関係性を矢印で示し、図解化して柱ごとの事例のまとめを作成した。最後に、事例のまとめから概念モデルを作成した。

赤い矢印は保護者と保育士の人間関係、黄色い矢印は保護者と保育士の信頼関係を築くことを表している。信頼関係は家庭支援の基盤であり、これを欠いては家庭支援が成り立たない。

赤い矢印は親子関係、黄色の矢印は保育士が行う親子関係への支援を表している。親子のつながりを支援し、親子関係を太くする。

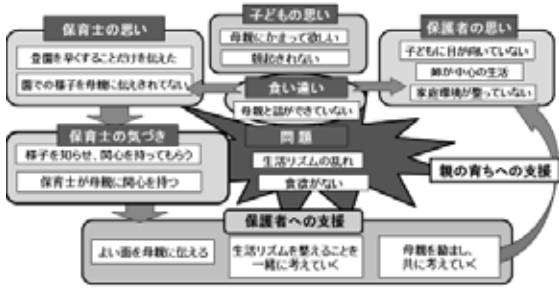


図5 柱3. 親の育ちを支える (事例のまとめ)

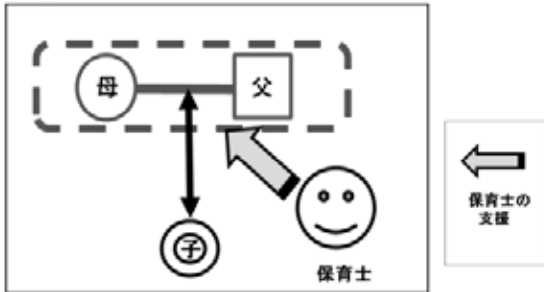


図6 柱3. 親の育ちを支える (概念モデル)

黄色い矢印は保護者への支援を表している。親の子育て力の向上を支援する。

②家庭支援の5つのキーワード

3つの柱を図式化したことにより、持ち寄った事例の関係性が整理された。そして、家庭支援を向上させるための課題を検討する中で、以下の共通する5つのキーワードがあげられた。

○子どもの最善の利益を守る

子どもの人権、子どもの気持ちを踏まえながら、その子にとっての最善の支援をおこなうこと。

○気持ちを受け止める

保護者の思いを受け止め、寄り添い丁寧に話を聴くこと

○保護者とともに子育ての喜び、子どもの成長の喜びを共有する

日々の送迎時等の会話を大切にし、子どもの成長を喜び、共感すること

○相互の信頼関係を高める

家庭、子ども、園の思いをつなぎ、信頼関係を構築すること

○保護者の子育て力の向上を支援する

保育士の専門性を生かし、保護者の状況に合わせ、保護者の子育て力を支援すること

そして、事例研究のまとめから、それぞれの柱の中で家族支援が十分な機能を果たせていないのは、保護者が考える家庭支援の思い（ニーズ）と保育士が考える家庭支援の思い（ニーズ）に食い違いがあるという仮説が得られた。そして、新たな課題として両者のアンケート調査に取り組むことを確認した。

2) アンケート調査

①事例研究を踏まえて

事例を検討していく上で、保育士（園・担任）と保護者が求めていること、思っていることには、食い違いがあることに気づいた。それを知るためにアンケート調査を実施することとした。

以下にその結果と考察を述べる。

②保護者アンケート結果と考察

- ・子育てで不安を感じることはありますか？

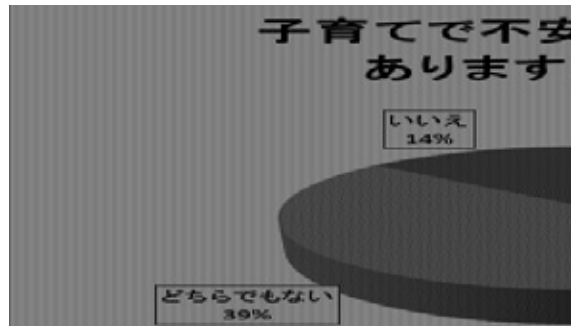


図7 子育てで不安を感じることはありますか？

「はい」47%「いいえ」14%「どちらでもない」39%であった。

このことから子育てで何らかの不安を感じている保護者が半数近くいることがわかる。また、どちらでもないと言う人が将来不安を感じる可能性があるとする、8割が不安を感じる可能性がある。すなわち何らかの支援・相談が必要な人たちといえる。家庭支援の必要性は益々高まっていることがうかがえる。

・子育てで困っていることは何ですか？

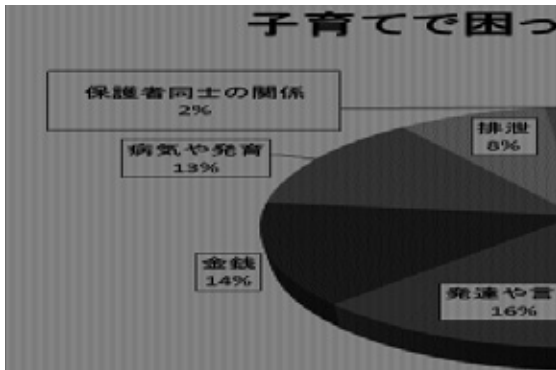


図8 子育てで困っていることは何ですか？

「子ども同士の関係」26%「食事」21%「発達や言葉」16%「金銭」14%「病気や発育」13%「排泄」8%「保護者同士の関係」2%であった。(複数回答・優先順位1位)

このことから保育園での子どもの様子を気にしている保護者が多いことがわかる。なかでも特に子ども同士の関係(けんか)を気にしている事が分かる。具体的な家庭支援の内容としては、母親の困り感を少なくするために園での様子を家庭に伝える事が重要である。子どものけんかについては、記述の中にも多く見られた。

・悩みを誰に相談しますか？

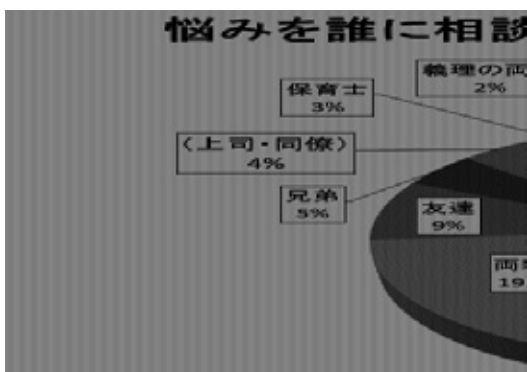


図9 悩みを誰に相談しますか？

「配偶者」55%「両親」19%「友達」9%であり、それに対して「保育士」は3%であった。(複数回答・優先順位1位)

このことから保育園での子どもの悩みを気にしているながら保育士には相談していない保護者が多いことが推測される。また、その順位は、親しい順になっている。保育者に相談していないということは保育園での詳しい様子を把握する事なしに、話しやすい親しい肉親や友達に子育ての悩みを相談しているようであるが、詳細な情報のない相談は十分な答があるとは思えない。このあたりに家庭支援の課題があるのではないかと家庭の様子、保育園の様子が分かって、保護者と保育士が話し合うことによって、初めて子どもにとってよりよい答が導き出されると考える。

・保育士に相談したことはありますか？



図10 保育士に相談したことはありますか？

「はい」84%「いいえ」16%であった。

問8で悩みを誰に相談するか保護者に聞いた結果、「配偶者」が約半数を占め、「保育士」はわずか3%であった。しかし、保護者の8割以上が保育士への相談を経験している。このことから考えてみても、悩みの相談と単なる相談は内容が異なるのであろう。子どもの様子や持ち物・行事の確認は軽い相談に含まれると考えているのであろうか。相談を定義していないので十分なことは言えないが、相談の内容の軽重に応じて相談相手を選択しており、子育ての深刻な悩みは近親者に、軽い悩みや疑問は保育士にと使い分けているのではないであろうか。

・保育士に相談しない理由として

「忙しそう」31%「不満・要求は言いづらい」17%「プライベートなことだから」12%という結果であった。

(複数回答・優先順位1位：保育士に相談したことが

ない人64名に質問)

このことから保育士に対して相談をしないのは、保育士の日常の仕事ぶりや対応が影響していることがわかる。また、「不満・要求は言いづらい」、「プライベートなことだから」と遠慮している事もうかがえる。すなわち、相互理解が進んでいない。

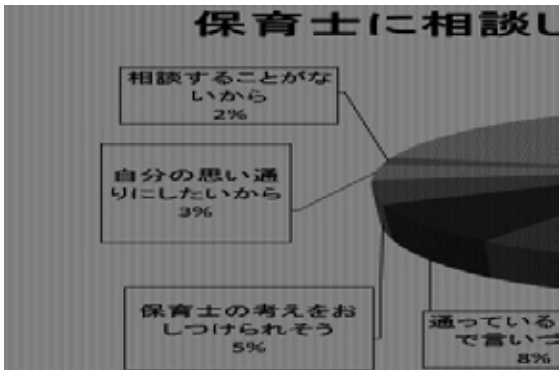


図11 保育士に相談しない理由として

本当に忙しいのか、クレームととられるのか、プライベートと捉えるのか、判断基準を持ち合わせていない。原因は保育士と保護者の間にコミュニケーションが少なく、信頼関係が形成されていないからこのような回答になるのだと考えられる。保育士だけでなく、保護者もお互いに歩み寄る必要があるのではないか。

③保育士アンケート結果と考察

・保護者との信頼関係は築けていますか？

保護者との信頼関係は築けていますか？n=135

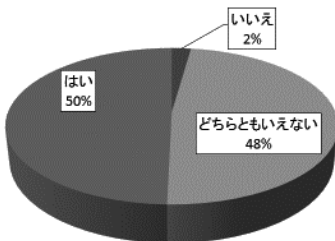


図12 保護者との信頼関係は築けていますか？

「はい」50% 「いいえ」2% 「どちらともいえない」

48%であった。

このことから保護者と信頼関係を築いていくことに自信のない保育士が半数程度いることがわかる。保護者アンケートで「悩みを保育士へ相談する」が3%となっていることを裏付ける回答であった。また、保護者にとっては子どもの唯一の保育士ではあるが、保育士にとっては何十人の子どもの保護者であり、個性や生活環境の異なる保護者への柔軟で弾力的、さらには即応的な対応を全てこなす事は、かなり困難なことと言わざるを得ない。逆に半数の保育士の回答が「信頼関係を築けている」となっている。家庭支援に対しての日頃の努力がうかがえる。

・保護者対応で心掛けていることはありますか？

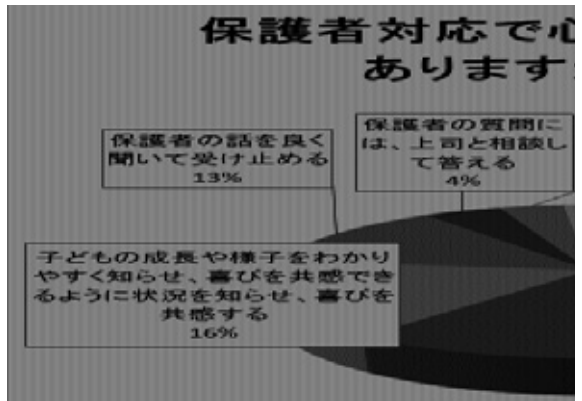


図13 保護者対応で心掛けていることはありますか？

「日頃のコミュニケーションを大切にする」は61%、「子どもの成長や様子をわかりやすく知らせ、喜びを共感できるようにする」16%、「保護者の話をよく聞いて受け止める」13%であった。(複数回答・優先順位1位)

大部分の保育士が保護者対応において「日頃のコミュニケーションを大切にする」事を心がけている事が分かる。しかし、前記のように全ての保護者への信頼関係の構築は難しいようである。立ち話から部屋での相談まで、かなり幅のある日頃のコミュニケーションに対応していく難しさであろう。大きすぎる目標を立てるのではなく、2番目の「子どもの成長とともに喜ぶ」を留意点として言葉の端に上らせることに努

め、軽い立ち話、挨拶から始める事がより現実的ではないかと思う。特に3番目の「保護者の話をよく聞いて受け止める」は、かなり重たく時間を必要とする対応となり、経験の浅い保育士にとっては難しく、他の保育士との連携を必要とする。

3) アンケートの記述欄から

保護者が保育士に求めていること、保育士が保護者に求めている事を書き出し、KJ法を使って図式化し整理した。それにより家庭支援の現状が視覚化され、お互いの関係がわかりやすくなった。

○保護者が保育士に求めていること

- ・もっと話を聞いてほしい
- ・園での様子を詳しく伝えて欲しい
- ・子どもの良いところをもっと話して欲しい
- ・子どもに温かい対応をして欲しい
- ・笑顔で挨拶をして欲しい
- ・気持ちよく接して欲しい

○保育士が保護者に求めていること

- ・保護者にもっと理解して欲しい
- ・毎日、お便りや連絡帳をよくみて欲しい
- ・子どもとの関わりを増やして欲しい
- ・コミュニケーションをしっかりとりたい
- ・家庭での生活習慣を整えて欲しい

並べ替えてみると以下のような対応があることが分かる。

家庭支援の問題点は、保護者と保育士のお互いの思いの食い違いと考えたが、結果を考察すると食い違いではなくお互いの思いは対応しているといえる。家庭支援がうまく機能していない原因は思いの食い違いにあるのではなく、お互いの思いの間にある環境にあるのではないかと考える。人的環境や経済的環境、労働環境、心身の健康等、保護者と保育士を取り巻く環境にあると考える。ソーシャルワークで言うインターフェース、相談者と被相談者をつなぐ境界面の環境にあると思われる。

事例研究は問題があるケースばかりを扱ったもので、その結果から導き出された仮説「保育士と保護者の思いの食い違い」は、事例の個別の問題が原因では

表1 保育士と保護者の思いの比較
お互いの思いは対応している

保護者の思い(ニード)	保育士の思い(ニード)
①もっと話を聞いてほしい	①保護者にもっと理解して欲しい ⑤家庭での生活習慣を整えて欲しい
②園での様子を詳しく伝えて欲しい	②毎日、お便りや連絡帳をよくみて欲しい
③子どもの良いところをもっと話して欲しい	③子どもとの関わりを増やして欲しい ②毎日、お便りや連絡帳をよくみて欲しい
④子どもに温かい対応をして欲しい	④子どもとの関わりを増やして欲しい
⑤笑顔で挨拶をして欲しい ⑥気持ちよく接して欲しい	④コミュニケーションをしっかりとりたい

なかったかと考える。先行研究を見ても、何らかの問題を抱えている保護者のグループと保育士のグループの思いが、アンケート調査の結果食い違っているものが見られる^{[9][10]}。問題を抱えるケースでは、すでに境界面の環境は悪化し、保育士と保護者のやり取りも困難になっており、当然のこととして思いも食い違っていたのではないかと考える。

今回のアンケート調査は、保育所利用の全ての保護者を対象としたものであり、より平均的な結果が出たと捉えるべきであろう。性善説ではないが、子どもを慈しみながら育てている親と職責を持ち保育に情熱をかけている保育士が、同様の思いを持つ事はより自然なことである。思い(ニード)が対応している結果を見ると、少しの後押しがあれば境界面を乗り越えてお互いの思いは通じるのではないかと、また家庭支援はよりよく機能するのではないかとと思われる。

家庭支援の境界面(インターフェース)

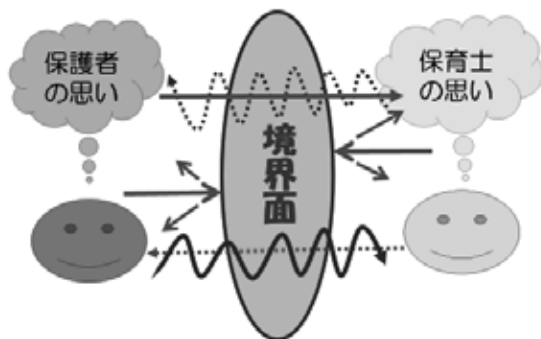


図14 家庭支援の境界面(インターフェース)

次に、家庭支援における境界面での思いのやり取りを、サービスの担い手とサービスの受け手のニーズのやり取りと考え、演繹的アプローチによってジョナサン・ブラッドショーのニーズ理論から考察する。

4) 福祉のニーズ理論から

ジョナサン・ブラッドショーは、福祉のニーズを以下の4つに分類している^[11]。

- ①ノーマティブ・ニーズ（規範ニーズ）：専門家、行政職員、研究者などが判断するニーズ
- ②フェルト・ニーズ（自覚ニーズ）：サービスの必要性を個人が自覚したニーズ
- ③エクスプレスト・ニーズ（表明ニーズ）：実際にサービスの利用を申し出たニーズ
- ④コンパラティブ・ニーズ（比較ニーズ）：利用している人と比較してニーズがあると判断されるニーズ

家庭支援のニーズも、専門家である保育士の把握するニーズ（規範）と利用者である保護者のニーズ（自覚・表明・比較）に該当し、同様に4つの枠組みで分類することができる。アンケート調査の内容を基にして分類してみると、エクスプレスト・ニーズ以外の三つのニーズは様々な場所で捉えられているのであるが、実際に利用を申し出るエクスプレストニーズについては十分受け止められてなく、利用者も表出を控えているように見える。ブラッドショーの言う2番目の例⁶⁾であり、サービスへのアクセスが困難であることにより、需要が制限されるケースである。

このことから、保育士と保護者の間（境界面）で、アクセス、すなわちニーズの表出と受け止めがうまくいっていないことが確かめられた。同じ思いは持っているのだが、お互いの思い（ニーズ）が十分伝わっていない。家庭支援の課題と言える。一番関係性の深い保育士と保護者が情報のキャッチボールをうまくできなければ、今何が足りていないのか、何に困っているのかがうまく伝わらず、十分なサービスを提供できない。軽いケースでは相談もされなくなり、問題が重篤化しないと相談ができない状況になってしまう。

それらの問題を防ぐには、普段からコミュニケー

ションを深めて、保護者が相談しやすい環境を境界面に構築していかななくてはならない。

次に保護者と保育士との境界面でのやり取りに関して、リスクマネジメントの理論から、ニーズとリスクの軽重や量について考察する。

5) リスクマネジメントの理論から

リスクマネジメントのハインリッヒの理論を援用して考えてみると^{7)[12]}。そのニーズの軽重と量からニーズを分類することが出来る。一番下には、リスクは軽い量が一番多い日常的な支援のニーズ（挨拶や連絡帳など）がある。二番目は集団での支援が可能なニーズ（保護者参観や保護者会等）がある。三番目は個別の相談支援ニーズ（子育ての悩み等）がある。一番上にはリスクが一番重く、量は少ない特別なニーズ（障害、虐待、事故等）がある。どこでも、いつでもできる挨拶や連絡帳から特別な場所や時間を必要とする虐待や障害などの深刻な個別の相談まで、家庭支援はいろいろなニーズの形を持っている。そして、家庭支援は日常的な支援のニーズを基盤として成立している。

家庭支援のニーズの形(リスクとニーズの重さと量から)



図15 家庭支援の形(リスクとニーズの重さと量から)

とかく、保育士は、一番重いニーズを優先して支援してしまいがちであるが、それでは対症療法になってしまう。保育士と保護者の思いは縮まらない。問題の解決だけでなくリスクマネジメントの観点からも、基盤となる日常的な支援のニーズから取り組んでいかななくてはならない。

日常的な支援のニーズを満たすことによって、保護者と保育士双方にとって良い影響がもたらされ、境界

面での困り感は減少し、相互の信頼関係が深まり、共通認識も増えてくる。当然、他のニーズの支援もよりスムーズに行えるようになる。ニーズが肥大していき、問題が大きくなることを防ぐことが出来る。すなわち、家庭支援のリスクを低減することが出来ると言える。

6) 家庭支援を向上させるために

これらのことから、家庭支援がうまくいくためには、お互いの思いを共有する環境を境界面に作る必要があると思われる。すなわちコミュニケーションを増やして信頼関係を醸成していくことである。しかし、言葉では簡単に書く事ができるが、実行するとなると大変難しい事だと思われる。その指針となるものが保育士アンケートの記述欄より抽出された。保育士は自ら、以下のような具体的な行動を課題とし、家庭支援を行おうとしている。

- よく聞いて受け止める
- 笑顔で挨拶をする
- 理解しやすい言葉を使う
- 保護者の気持ちになる
- 誠意、丁寧な対応を心がける
- 子どもの成長を共感する
- 必要な事は必ず伝える
- 話しやすい環境をつくる

しかし、アンケートの両者の記述を読むと、保育士の努力だけでは十分でないと思われる。保育士のみが近づいていってもすれ違うことが多いと思われる。保護者の側からも歩み寄ってもらう必要があると思う。お互いに近づけば食い違いのリスクは減少する。具体的には、保護者にもっと保育に関心を持ってもらい、保育の現場、他人の子ども達、保育士を知ってもらう必要がある。

ではどのようにすればよいのであろうか。日常的な支援（挨拶・連絡帳等）、集団の支援（保護者参観・保護者会等）だけではなく様々な機会を捉えて発信していくことが必要ではないか。また、保護者の思いを受け入れ、協働で子育てに当たる意識も必要であろう。境界面の環境をハードからソフトまで、「受け入

れてくれそう」、「話しやすそう」、「情報がたくさん」、「楽しそう」等が感じ取られるようなものにしていく保育士の努力が必要とされる。

そのため、保育士を勇気付け、後押しするのは以下のような家庭支援の具体例（事例）である。

保育士との対応で嬉しかった事という質問の答は、保育士にやりがいを感じさせ、同時に保護者に喜びと感謝の念をもたらしている。400名の保護者のうち半分近くが嬉しかった体験を経験している。その一部を以下で紹介する。

- いつも子どもの事をみてくれたり考えてくれたりして、本当に感謝している。親の気持ちも気にかけてくれて嬉しかった。
- 直接話はできなくても、連絡帳に悩みや不安をかくと丁寧な答えてくれた。
- 朝の登園時、急いでいるときや、子どもが言うことをきいてくれず、困っているときに子どもと同じ目線で、話を聞いてくれた。

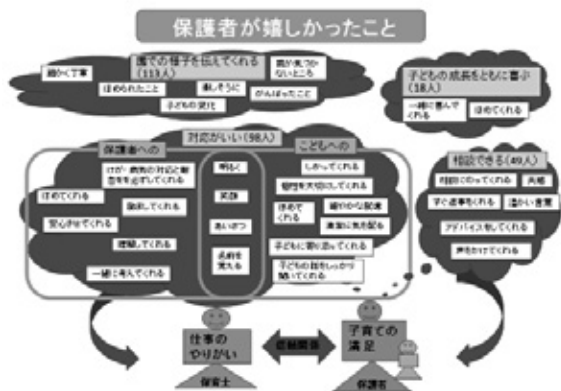


図16 保護者が嬉しかったこと

こういった保護者が嬉しかった体験を増やしていくことにより、保護者が保育士の対応を評価する機会が増え、相談できる相手という認知が高まり、また、保育士自身が自らの仕事を再確認し「やりがい」を感じる。そのような相乗効果が生まれれば、家族支援の基盤である境界面の環境はより高まっていくのではないかと。

5. まとめ ～今後に向けて～

2018(平成30)年度より保育所保育指針は改定され、保護者に対する子育て支援は益々重要となってきている。本稿では家庭支援の形を、現場の保育士と共に帰納的アプローチに基づき、質的研究である事例検討から始めて三つの柱に分類し、概念モデルを作成した。そして保育士や保護者にアンケート調査を行うことにより家庭支援の現状を確認し、課題についてアンケート調査や福祉のニード理論、リスクマネジメントの理論より考察した。また、家庭支援をより高めるための方法を提示した。

この研究を通して家庭支援研究部会の保育者は、保護者の思いを十分に受け止め、家庭環境の背景を踏まえたうえで、一人ひとりの保護者にあった、適切な声かけや、伝え方など、関わるときの基本的な姿勢を意識し、信頼関係を築いていくことの大切さを実感した。しかしながら、アンケート結果に表れているようにまだまだ十分なものとは言えない。

家庭の形が幅広く、個別化が進んだ近年、様々な課題に対応するために、保育士はそれぞれが組織として情報を共有し、連携をとることや研修を通して、保育士の家庭支援へのスキルを高め、保育所全体で取り組むことが大切だと考える。

これからも保護者が求めていることに寄り添い、子どもの育ちを共に支えながら、すべての子どもの健やかな育ちを願い、家庭支援が実践できるように努めていきたいと思う。

註

- 1) 「保護者支援」とは、2008年度保育所保育指針において試用された保護者に対する子育ての支援を指す。
- 2) 「子育て支援」とは、2018年の保育所保育指針の改定により、保護者支援に変わる言葉として使われた。
- 3) 「家庭支援」とは、保育指針にある保護者支援、子育て支援と同様の内容を指す。保育士の間では保護者支援の堅いイメージを嫌い、家庭支援を使うこ

とが多い。

- 4) 「演繹的アプローチ」とは諸前提から理論の規則にしたがって必然的に結論を導き出すこと。
- 5) 「帰納的アプローチ」とは個々の事実や命題の集まりから共通する性質や関係を取り出し、一般的な命題や法則を導き出すこと。
- 6) ジョナサン・ブラッドショーの2番目の例とは、ノーマティブ・ニード(規範ニード)があり、フェルト・ニード(自覚ニード)とコンパラティブ・ニード(比較ニード)もあるが、エクスプレスト・ニード(表明ニード)がない場合を指す。

利用者はニードをもっており、専門職もニードが存在するのを認めているが、利用者本人から申し出がない、あるいは申し出を受ける体制が整っていない状態。

- 7) ハインリッヒの法則とは、労働災害における経験則の1つで、1つの重大事故の背景には、29の軽微な事故があり、その背景には300のヒヤリハットが存在するという法則である。重大な事故というのは、軽微な事故を防いでいれば発生しないものであり、軽微な事故はヒヤリとするような事故を防いでいれば発生しない。

引用・参考文献

- [1] 汐見稔幸(2018)「日本の保育・幼児教育はどこへ向かうのか」『発達』2018年154号, ミネルヴァ書房, p.2
- [2] 大日向雅美(2014)「子育て支援のこれまでとこれから」『発達』2014年140号, ミネルヴァ書房, p.2
- [3] 長田浩志(2014)「当事者参画で進める子ども・子育て支援新制度」『発達』2014年140号, ミネルヴァ書房, p.10
- [4] 日本保育協会(2013)「子どもが育ち親も育つ地域がつながる子育て支援—新しい子育て文化の創造をめざして—」『地域における子育て支援に関する調査研究報告書』社会福祉法人 日本保育協会
- [5] 厚生労働省(2007)「新保育所保育指針解説(平成20年告示)」厚生労働省

- [6] 厚生労働省 (2017)「保育所保育指針 (平成29年告示)」厚生労働省
- [7] 山縣文治・金子恵美・中谷奈津子ほか (2008)「保育士の子育て支援業務におけるソーシャルワーク機能の検討」
大阪市立大学少子社会科学研究室
- [8] 中谷奈津子・鶴宏史・関川芳孝 (2015)「保育所における生活課題を抱える保護者への支援：保護者支援・保護者対応に関する文献調査から」『大阪府立大学紀要人文・社会科学』63, 大阪府立大学高等教育推進機構, p.35
- [9] 中平絢子・馬場訓子・竹内敬子・高橋敏之 (2016)「事例から見る望ましい保護者支援の在り方と保育士間の連携」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第6号別冊, p.21
- [10] 石川昭義・堀美鈴 (2010)「今日の社会における子育て支援の意味と保育士の役割—犬山市の調査をもとにして—」『仁愛大学研究紀要人間生活学部篇』第2号, 仁愛大学, p.81
- [11] Bradshaw, J. (1972)「A taxonomy of social need. in McLachlan, G. (ed.),『Problems and progress in medical care: essays on current research』, 7th series. London: Oxford University Press, p.70
- [12] 社会福祉士養成講座編集委員会 (2017)『福祉サービスの組織と経営』中央法規出版, p.157
- [13] 白幡久美子他 (2018)『保育士を目指す人の家庭支援』みらい
- [14] 秋田喜代美他 (2018)『保育士等キャリアアップ研修テキスト6保護者支援・子育て支援』中央法規出版
- [15] 原坂一郎 (2008)『保護者とうまくいく方法』ひかりのくに
- [16] 大場幸夫他 (2010)『保育所保育指針ハンドブック』学研教育出版
- [17] 保育と虐待対応事例研究会 (2004)『子ども虐待と保育園』ひとなる書房
- [18] わたなべめぐみ (2005)『信頼関係が築ける保護者との話し方』ひかりのくに